



宮城県亘理町の避難所で子どもの遊び相手をするクラウンたち=5月4日、日本ホスピタル・クラウン協会提供

つかの間でも、つらさを忘れて 東北に笑顔 道化師行く

道化師が東日本大震災の避難所を回っている。病院で闘病中の子どもを元気づけているクラウン(道化師)によるNPO法人「日本ホスピタル・クラウン協会」(本部・名古屋市)のメンバーたち。「つらい状況をつかの間でも忘れてほしい」と話している。

名古屋のNPO 避難所訪ね活動

協会は2005年に設立し、名古屋を中心に全国で42人が活動している。震災後、10人以上がワゴン車やフェリーでそれぞれ宮城、福島両県の避難所を訪ねた。協会の東京や東北支部からは、福島県の避難所を定期的に訪ねている。1カ所所30分ほどパフォーマンスを観ては、場所を変えたり、一日中、同じ場所でも続けたりしている。

クラウン「K」こと、協会理事の大棟耕介さん(42)は名古屋から3回被災地に入った。4月中旬、初めて福島県郡山市の避難所に来たとき、「難しいかな」と思った。病院で子どもと向き合うのは違い、あちこちから視線を感じた。お年寄りの姿が目立った。「相手をかわいそうと思っ

ては、心から喜んでくれることではない」。病院訪問と同様、相手の表情を読み、演技を前面に押し出さず、オルガンを鳴らしながら相手との距離を少しずつ縮めた。頃合いを見計らって、ボールをお手玉のように投げるジャグリングやパントマイムをした。

宮城県の避難所では、身内の遺体が確認されたばかりのおばあさんが泣きながら笑ってくれたという。名古屋の「シャンティ」こと村木美智さんは4回現地入りした。当初は「不意な言葉で傷つけないだろうか」と戸惑ったが、次第に不安は消えていった。クラウンおなじみの赤い鼻を見て、被災者からは自然と笑顔がもれた。風船をねじって花を作る「風船アート」が好評で、「私にも見せて」と寄って来るお年寄りもいた。

年頃の子がいる母親からは愚痴も聞いた。村木さんは「クラウンは、色々な形で被災者の思いを受け止められる」と改めて思った。

5月、大棟さんが宮城県気仙沼市などを訪れた際、被災者の表情から疲れやいらだちが垣間見えた。避難所生活が長期化し、「心の持ちようが変わりつつある」と感じた。

今は避難所にこもらないよう、なるべく外で演技を披露するように切り替えた。サーカスのように学校の校庭などに舞台をつくり、演技を披露する計画も立てている。

(相原亮)